

コロナ禍・ポストコロナの支援機器関連領域 —情報共有と未来—

COVID-19パンデミックは、社会の様々な状況を一変し、人と人の関係や、人と物の関連性、社会のあり方など、多くの事柄についてその根本を見直す機会を提供したとも考えられる。高齢者や障害者を取り巻く状況も大きな影響を受け、今もなお、多くの課題が山積している。本シンポジウムでは、このような中で、支援機器を取り巻く領域で起こった出来事や、それにより発生する様々な問題点、それらに対応するための取り組みや工夫を共有し、それらを経験した我々がポストコロナの支援機器関連の研究や実践にどのように活かすことができるかを考えることを趣旨とする。

S2-1 コロナ禍で再確認した支援機器と介護者の大切さ

越澤 孝

頸髄損傷当事者

福祉サービスを利用しての地域生活も25年が過ぎた。その中で震災など生活が危ぶまれることもあったが、このコロナ禍が最大の危機であった。介護者とお互いの感染予防はもちろん、非常事態宣言で介護者が訪問できない、外出できない、また介護者によりコロナへの考え方の違いも大きなストレスとなった。またひとりの時間も増えそのバックアップとして支援機器を最大限に活用し生活を続けられたことも大きい。シンポジウムではコロナ禍での当事者の苦難、安心をもたらした支援機器。無くてはならないサポートする介護者。それにより見えてくる危機管理や支援機器の更なる活用を提案する。

S2-2 COVID-19パンデミックで再認識させられた 介護現場における業務改善の必要性

大野 悦子

(医)和幸会 介護老人保健施設パークヒルズ田原苑 施設長

COVID-19パンデミック下の介護施設では、従来からのスタッフ不足のところに、感染対応により業務が増加、さらに、感染者／濃厚接触者として相次いでスタッフが出勤できず、現場のストレスと疲弊は多大で、サービスを維持できず、介護崩壊に陥った施設も出た。介護現場における業務改善は多くは個々の施設努力に帰せられてきたが、今、介護現場は、業務の合理化・業務負担の軽減が介護業界全体の喫緊の課題であることを再認識し、効率的な福祉用具／機器の開発・導入のスピードアップを切望している。

S2-3 在宅医療用機器の現状と課題

苗村 潔

東京工科大学 医療保健学部 臨床工学科 教授

在宅医療では、医師、看護師、臨床工学技士が頻回に患者に関わることが難しく、専用機器へ期待と要望は大きい。本講演では、1)呼吸を補助する人工呼吸器と酸素濃縮器が、COPDなどの潜在的な患者が多く、コロナ禍もあいまって、今後極めて大事であること、2)痰吸引が患者に苦痛であること、3)在宅血液透析における穿刺補助技術が必要であることについて、技術の現状と今後の展望について述べる。

S2-4 コロナ禍で加速したロボティクス活用

安藤 健

パナソニック ホールディングス株式会社 ロボティクス推進室 室長

新型コロナウイルスは、多くの人の暮らし方、働き方を激変させた。そして、コロナ禍において時間や場所を超えるための技術の社会実装も進んだ。一度社会に浸透し始めた技術は、ポストコロナにおいても新しい体験のために活用されるであろう。これは、健常者のためだけのものではなく、様々な支援が必要な人にとっても、有用になる可能性を十分に秘めている。本講演では、ひとやモノの移動、そして、人と人のつながりなどを事例にその可能性を探ってみたい。